シリーズ

季（とき）のことば「冬」

「ことば」によって
豊かな四季を楽しむ私たち日本人。
名句や名歌を訪ねながら、
日本文化の豊かさをご紹介いたします。

季（とき）のことば「冬」

私たち日本人は、季（とき）に名前をつけ、
豊かな四季を楽しむ術をもっています。
季（とき）のことばの美しさを感じ、
季節のうつろいの中に
「ゆとり」をみつけてみませんか。

水仙は寒さが厳しい12月から1月にかけて咲く冬の花。清々しい香りが特徴で、花が少ない時期となる、お正月の切り花にも重宝されます。種類が豊富な花で春咲きの品種もあり「黄水仙」は春の季語となります。

文字を見てもわかるように、水仙は水と縁が深い花です。ギリシャ神話には池に映る自分の姿に恋い焦がれて死んでいった青年、ナルシスの化身とされ、中国では水の仙人と称されています。日本では、日当たりが良い海辺に多く自生し、特に福井県の越前岬や伊豆の爪木崎は、野水仙の群生地として有名です。爪木崎では毎年「水仙まつり」が開かれていて、約300万本もの水仙が芳香を漂わせ、訪れる人々の目を楽しませてくれます。

雪が多い地域でもすっくと立って花を咲かせることから、水仙は別名「雪中花」とも呼ばれています。荒れる海の眼前に群生する姿、雪の中で可憐な花をりりしく咲かせる姿は、多くの俳人を今なお魅了してやみません。

水仙や来る日来る日も海荒れて

鈴木真砂女

【季語】水仙

冬のことば

狐火

山野でゆらめく正体不明の青白い火。かつては狐が灯す火と信じられ、東京の王子稲荷神社の「王子の狐火」が有名。

嫁が君

正月三が日の間だけに使われる、鼠の異名。昔はお正月には使ってはいけない忌み言葉があり「鼠」はその一つ。

おでん

豆腐を串に刺して味噌をつけてあぶった江戸時代の田楽がもと。後に大根や蒟蒻などを煮込む今の「おでん」となった。

日記買ふ

来るべき年に備えて新しく日記を買うこと。「古日記」という季語もあり、こちらは年末でページが残り少なくなった日記。

凍豆腐［しみどうふ］

豆腐を凍らせて乾燥させたもの。寒さの厳しい地方で作られ、高野山の僧が考案したという説もあり、高野豆腐とも。

煮凝［にこごり］

寒い日は煮魚を一晩置いておくと魚のゼラチンで固まる。酒の肴にも、温かいご飯にかけて溶かしながら食べるもよし。

竈猫［かまどねこ］

竈は台所で煮炊きする場所。快適な場所を見つける名人でもある猫が、火を落とした竈で暖をとる様。「炬燵猫」とも。

ふくら雀

冬場は餌を求めて庭に来る雀。寒い時期に羽に空気を入れて膨らんでいるその姿は愛らしい。「福来雀」と書くことも。

冬の名句

山茶花や雀顔出す花の中
松岡青羅【季語】山茶花

冬ざれの厨に赤き蕪かな
正岡子規【季語】冬ざれ

宿までは氷柱明りの峠道
斎藤夏風【季語】氷柱

着ぶくれて浮世の義理に出かけけり
富安風生【季語】着ぶくれ

寄鍋にもつとも遠き席当る
中原道夫【季語】寄鍋

冬の名歌

夕されば　衣手さむし　みよしののよしのの山に　み雪降るらし
詠み人知らず

あらたまの　年の若水くむ今朝はそぞろにものの嬉しかりけり
樋口一葉

しらしらと　氷かがやく千鳥なく釧路の海の冬の月かな
石川啄木

※「季語」とは、連歌、俳諧、俳句において用いられる特定の季節を表す言葉。